山の物語

角のある人

永代美知代

▲二▼

『ヤ！百合さんが落ちた！』

助手達はすぐさま數十丈の谷底へと降りて行く、暮れるに早い山の上は、たつた今の先き太陽が落ちたばかりの六時過ぎだと云ふのに、もう四邊一面夕暗が押し寄せた。刻一刻と暗さは迫る、這松の根に脚は捕られる。命がけで氣を急きながら、助手達はたゞ〳〵途方に暮れた。

一方、頂上から谷底へと轉がり落ちた百合子は如何したか、小さな石塊を蹴飛ばしてさへも、はづみを打つて面白いほど轉がり落ちる甚い斜面なのだから堪らない。十一歳の少女とは云へ、假りにも人間の體だけに、百合子は烈しい速度で、まゝるではづみ切つた毬のやうに轉がつた。たゞ一息に何十丈、その早い事早い事、木の根岩角に引掛つたが最後、百合子の體は或は八つ裂に、或は粉微塵に裂け碎けたに相違ない。併しながら、幸にも百合子の體の停つた處は砂地であつた、そして百合子は九死に一生を免かれた。

云ふまでもなく百合子は、氣が遠くなつて居た。思へば、よくも氣絶しなかつたのがふしぎな位である。死なずに濟んだが、助かつた、嬉しいと思ひながら、起き上る元氣もなくて、百合子は唯しくりしくりと泣きはじめた。

『此處は何處か知ら？』

あたりを見廻すと、あいにくまた煙のやうな夕霧がたてこめて、一寸先きさへ見わけがつかない、靜かに耳を澄ますと、何處やらに溪流の音が聞える。

『あの川が中房川だと好いけれど……。』

考へると心細いので、百合子は又してもとめどもない涙にむせび泣いた。

やがて、近くにノソリノソリと何者かの足音がするので、百合子が驚いて涙の眼を見据ゑると、二三間先きに、眞黑なものが動いて居る。と、百合子は何かしらぞつとした。

『熊だ？』

一生懸命に見据ゑて見ると、それは果して百合子の考へた通り熊であつた。おまけにノソリノソリ此方を指してやつて來る。今はもう逃げるにも逃げられない。

『仕方がない、死んだ眞似をして居よう。』

百合子は急に思ひついて、すぐに寢轉んだ、そして眼を閉ぢ、息をこらした。

熊はノソリノソリと、身近く寄つて來た。どうなる事かと、ビクビクものゝ百合子は、ともすれば體が慄へて仕方がない、もしやして生きてる事を氣取られはしないだらうか、一口にガクリと嚙みつかれたらどうしよう——と、殆んど生き心地もないまでに怖かつて居る百合子の顏を、熊は遠慮もなくのぞいたり、嗅ぎ廻つたりする、動物に特殊な血生臭い鼻息を吹き掛けられて、その氣味惡さ、怖さと云つたらない、百合子は危なく聲をたてさうにしたが、その都度思ひ返しては、靜かに息をこらした。

熊は幾度となく嗅ぎ廻り嗅ぎ廻りしてゐたが、やがて百合子の帶ぎはを引きくわへた。百合子はハッとしたが、なほも死人の樣を裝つてゐると、熊は百合子を口にくわへたまゝで、道もない熊笹の茂みの中へと入つて、ノソリノソリ歩いて行つた。

百合子はじつと眼を閉ぢて居たが、ザワザワと熊笹の葉摺れの音もしなくなり、ものゝ葉にうるさく顏を觸られることもなくなつて、急に瀨の音が耳元に物凄く響くので、怖々そつと眼を開いて見た。

日は已にとつぷりと暮れて、暗さは暗し、あたり一面たゞ眞暗な中に、帶のやうな溪流が一筋、白く流れて見えた。

その白い溪流に沿うて、熊は百合子をくわへたまゝ、相も變らず悠然たる足取りで進んで行く、恐らくは何處かそこらの森陰にある巣に連れられて行くのであらう、そして連れられて行つた上、どうなり行く身の上なのであらうか、きつと怖ろしい齒に嚙まれて殺されてしまふに相違ない——百合子は心の

中で泣いた、祈つた。

『父樣、母樣、神樣、どうぞ助けて下さいまし。』

忽ち物凄い唸聲に驚かされて百合子は思はず眼を開いた。それはもう死んだ樣を裝つてゐることも何も忘れてしまつたほど、物凄い唸聲であつた、而もその唸聲は、どうやら自分をくわへて居る熊の口から出たやうに思はれた。

『どうしたのだらう？』

それにしても、今の處百合子は熊の口から振り落されては大變、矢を射るやうな早瀨に押し流されなければならぬ危いハメに居るのである。百合子は熊の態度に氣をつけた。

熊はまたウォーと叫んで今度は何者かにかゝつて行くやうな風に、身構へをしたまゝ立ちすくんだ。

と見ると、前方に自働車の燈火のやうに爛々たる光が輝いて、而もだん〳〵此方を指して近づいて來る。これだ、熊はこの光に向つて唸聲を發したのに相違ない。それにしてもこの山の中、日本アルプスの山奥に自働車のあらう譯はない、そしてまたその光も、自働車の燈火にしては小さ過ぎるやうに思はれる。百合子

はその光の正體を見定めようとした。

『何か動物の目玉らしい。』

斯う考が定まると、百合子はまた新らしい不安と恐怖に襲はれた。熊はあの目玉と戰つて、負けないですむかしら？　幸に勝てばいゝけれど、負けた時にはどうなる事か、えたいの知れぬあの目玉にさらはれて殺されるのは嫌だ。勝て、勝て熊よ、負けないやうに――。けれども、この時熊は今一度烈しく唸ると同時に百合子の體を一振り振つて振り落したまゝ、一目散に横手の茂みに駈け込んだ。

振り落された百合子は、危く溪流に流されかゝつた、必死と岸に取りすがつたけれど、腰から下は急流に浸されて、ともすれば押し流されさうになつて來る。おまけにその水の冷たい事と云つたらない、いつそ切られるやうな冷たさに、やがては凍え死んでしまふだらうと思はれた。

かと云つて、一生懸命あるだけの力を出して、岸から上に這ひ上つた處で、其處にはあの怖ろしい目玉が、爛々たる光を輝かしてゐるではないか。いつそもうえたいの知れぬ動物の齒にかゝつて死なうより、高嶺の雪がとけて流れたこの溪流に落ちて死んだ方がましかも知れない。

百合子は身を切るやうな冷たさを堪へて、岸から上に上らうとはしなかつた。けれども目玉は近づいて、いきなり百合子の帶ぎはをつかんだ。併しながら百合子が覺悟の眼をつぶつたにもかゝはらず、目玉は決して嚙まうとはしなかつた、熊のやうに氣味惡い鼻息をかゞせもせず、靜かに靜かに抱くやうにして、水から上へと引き上げる。

餘りの不思議に、氣味わるゝ〳〵そつと薄眼を開けた百合子は、目玉の頭に角を見た。

『鬼だ！』百合子はキャッと叫んで氣絶した。爛々たる目玉の上に、角まで生やした怪物の姿を見て、驚かないで居られようか、而も夜は暗く、人里離れた深山の谷間だから堪らない。――（つゞく）――